

春の彼岸によせて

平成十六年三月 大乘寺 住職 岡 光俊

子供の問題があとを絶ちませんが、そのときに視点をその子に向けるのかその親に向けるのかにより、問題解決は大きく異なると思っています。私はこのとき、親に視点を向けるべきだと思います。

子供を見下すしかできない親。親の立場や権利を振り回し、子供のほんの一部を見てなんでも解っていると思っている親。それは、勝手に自分で都合よく作り上げた子供像で親の妄想と気づくべきでしょう。如何に無知で上辺だけの理想の親の役になりきろうとしているか。そんな親のエゴのために苦しむのは、何時もなにもいえない弱い立場の子供です。

親の立場は、どなたに、なんの目的で与えて頂けたのでしょうか。親である方達が、自分の足りない部分を補うことなく、人の心を持つた子供を育てさせて頂くことはできません。「親以外に子供を守れない」という親は、人の心は持っていない。親たちは仕事に対する努力はしたでしょうが、親にならせて頂くための努力はしなかったのでしょうか。また親は子供が悪い方向にいけば、子供の努力が足りなかったんだと、誰が聞いても否定できない答えを用意し、親の責任を逃れ、知らないからできることなのでしょうが涼しい顔をしてすべてを子供に押しつけます。その原因が自分にあることなど、思ってもみないのです。自覚がないということは病気と同じで、子供は悪化の一途を辿ることになります。

日々の生活の中で常に損得を考えて行動されている方がおられますが、果たしてこの世の生きとし生ける物たちは、自らを考えて生きていくのでしょうか。自然界はすべて連鎖の中で生かされていることに気づきます。人もまたその連鎖の中に溶け込んでいました。この連鎖は誰が作り上げたのでしょうか。人間でないことは確かです。科学でも医学でも、あらゆる人智の最高峰まで上り詰めた研究には、説明できない法則に辿り着くそうです。その領域を、学者たちは神の領域と呼んでます。

人としてこの世に生まれさせて頂いたこと、それは既に損得を遙かに越えた存在であることに気づくべきではないでしょうか。人も神佛の領域であり、宇宙規模の壮大な連鎖の中で損得を考えている生命は唯一、愚かな人間のみではないでしょうか。

宗教を嫌うかたは何時いつの時代にも沢山おられます。大変よく解ります。欲を願い、叶えてもらおうなどと、碌に努力もせず、ということでしょう。しかしそれは宗教ではありません。本来の宗教は、人間生活の利益のこと、欲を満たすための低俗なことは、お釋迦さまの教えにはございません。手を合わせるときは、ご先祖さまの成佛を願うとき、神さまに人として正しい生活をしますと誓いを立てるときです。決して欲を願うものではありません。例えあなたが願うことをしたとしても聞いて頂けることはありません。ご神佛の存在を知ろうともせず、己おのれの欲のみに目が眩んでいる生き物のいうことなど、受け入れられるご神佛はこの宇宙にはご一体もおられません。しかし悪魔はそれらの欲を受け入れてくれます。人は何時いつからかご神佛と悪魔を見間違えて接してしまっているようです。

家族の事故や病、不都合な出来事は親が原因だといわせて頂きます。それは今回お考え頂きましたように、親が、自分の足りない部分を補わずにきたこと、気づかずにきたことが大きな原因になっているからです。親にならせて頂くためには親の心をお持ち頂くことが大切なことなのです。人の親としての心の成長は、お釋迦さまの教えを深く静かに学ぶよりほかにはありません。日々起きる家庭の問題、人間が引き起こす問題のすべては、人として持つべき心の欠落が根本原因にあると思います。

春の彼岸、

自分自身が、無限のエネルギーで生かされていることを知り、人は初めて感謝ができるのです。自分の存在を自然の中で静かに顧みることができれば、人は己おのれの愚かさおのれに気づかせて頂けるのではないのでしょうか。宗教とはこのような気づきの一つ一つをお釋迦さまの教えの中で学ぶことをいいます。

日常生活の中で起こるすべてのことは夫婦に託されています。このことに気づかれたかたは、正しい心を取り戻すためにお釋迦さまの教えを学ばせて頂き、明るく楽しい心穏やかな毎日を送らせて頂かれることを切望致します。

合掌